「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群　紹介

九州北岸の宗像大社は 1,500 年以上の歴史を有し、日本とアジアの貿易・外交に大きな役割を果たしました。宗像の古代の神社や島々を訪ね、日本の歴史や初期の貿易を背景として、儀式的な信仰や厳しい慣行がどのように発展したかを知ることができます。

三姉妹のための三つの神社

宗像大社は、本土の辺津宮と大島の中津宮、そして沖ノ島の沖津宮の 3 つの神社からなります。日本で最も崇敬されている神である太陽神・天照大神の娘の三女神が信仰の中心となっています。古代には、中国や朝鮮半島に航海に出る前に、旅人はそこに祀られている神々に祈り、安全な帰航の感謝をささげました。

最もアクセスしやすい神社は海岸にある辺津宮で、福岡市から公共交通機関で約 1 時間です。1578 年に建立された本殿は、天照大神の娘の一人・市杵島姫神を祀っています。本殿の裏山の高宮祭場では、三神が地上に降臨したとされています。本殿の背後にある 2 つの末社は、大島と沖ノ島に祀られている他の二神を祀っています。これにより、本土を離れずに三神すべてを参拝することができます。

島の神社

大島は天照大神のもう一人の娘・湍津姫神を祀る中津宮のある島です。地元の船員や漁師らが海上での安全と豊漁を祈ります。

沖ノ島にある沖津宮には、天照大神の三女・田心姫神が祀られています。島全体が神聖視されているため、一般公開されていません。訪れることができるのは宗像大社の神官だけです。神官は島に足を踏み入れる前に、禊として知られる儀式において、海で沐浴をして身を清めなければなりません。

ユネスコ世界遺産

沖ノ島では、日本最古の歴史書・古事記(712 年)より以前の 4 世紀にまで遡る祭具が発見されています。島への外来者を禁止する厳格な禁忌のおかげで、沖ノ島の遺産は非常によく保存され、
そこで行われた儀式の貴重な記録を提供すること出来たことが、ユネスコの世界遺産登録をもたらしました。沖ノ島で見つかった 8 万点の祭具や宝物の多くは、辺津宮境内にある神宝館に展示されています。

ご祭神を祀る三社と、かつてこの地域を治めていた宗像氏の古墳が、2017 年に「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群としてユネスコの世界遺産リストに加えられました。